令和七年春彼岸法話

聖教の発音について

正信寺　石川英和

令和七年三月二十日　正信寺　春彼岸　法話

聖教の発音について

石川英和

【はじめに】

本日もご多忙のところ、お彼岸にお参りいただきましてありがとうございます。

いつもであれば、信心についてお話しさせていただくのですが、本日は浄土真宗の聖教（しょうぎょう）の発音についてお話ししたいと思います。聖教というと、お釈迦様や親鸞聖人や七高僧の教えを記したものという意味に使われることもありますが、仏教の教えを伝え、声を出して読む聖典という意味で、お経、偈文、和讃、御文なども含めた意味で使わせていただきます。

本日もお彼岸法要として、仏説阿弥陀経、正信偈、和讃、回向、御文を称えさせていただきました。そのなかで、ちょっとした作法というか、気にしている点があるので、それをお伝えできれば良いと思います。本来は、声明と言って、音楽的な節をつけた発声を含めてお伝えしたいところですが、今日は、言葉の発音に限ってお話ししたいと思います。

私は、長年、東上野にある東京大谷声明学園に声明や作法の学習に通っております。姉も、長く通っていました。そこで習ったことに加え、中公新書の釘貫亨（くぎぬきとおる）著『日本語の発音はどう変わってきたか』という書籍の内容を引用しつつ、お話しさせていただきたいと思います。

【呉音・漢音・唐音】

中国語は、漢字一字に対して読み方はひとつに決まっています。ところが日本語は、そうはいきません。

例えば、次の文章を音読してみます。

「銀行員の行男は、修行のために諸国行脚を行った。」

今の文章の中に「行」という漢字がいくつ入っていたかお分かりですか。5カ所で使用していますが、全て読みが異なります。

私たちは、「行」という漢字に対して読み方をいくつも覚えなければならないのです。特に、日本には、音読みと訓読みがあります。

訓読みは、漢字文化が入ってくる前からあった日本語の言葉に、後から入ってくる仏教に使われる漢字を当てはめてしまうという事で、仏教と日本の大和言葉を両立させるための苦し紛れの解決方法だったのではないかと想像します。

「行く」、「行う」は大和言葉に漢字をあてた、訓読みです。

「修行（しゅぎょう）」は、呉（ご）音です。

「銀行」は、漢音です。

そして、「行脚（あんぎゃ）」は、唐音と呼ばれます。

それぞれ、日本に入ってきた時代と経緯が異なります。

中国の人は、日本語を学ぶにあたり、漢字の意味を理解できても、漢字の読み方のバリエーションが一つしかない習慣が邪魔をして、実際の日本語の漢字の読み方を習得するのは難しいと思います。ましてや、仏教に帰依して古い呉音で読経することは至難の業になるようです。

【お経が日本に入ってきた時代】

日本に仏教が伝来し、定着したのは大化の改新の少し前、六世紀から

七世紀初頭です。大化の改新によって、日本は仏教で政（まつりごと）をする国になりました。

仏教の発音、「如来（にょらい）」「阿弥陀（あみだ）」という言葉は、呉音といいます。呉の国で使われていた発音が、そのまま輸入されました。

八世紀になると、唐の律令制度を導入するために、唐で使われた漢音の言葉が入ってきます。儒教の言葉も漢音で表現することが多いです。「人間」を「にんげん」と読むのは呉音、儒教で「じんかん」と読むのは漢音です。

実は、『仏説阿弥陀経』や『法華経』も漢音の読み方が残されています。『仏説阿弥陀経』を呉音では「ぶっせつあみだきょう」、漢音では、「ふせあびたけ」と発音します。今年の一月に、横浜の旭区にある成願寺の落慶法要に参列させていただき、『漢音仏説阿弥陀経』を称えました。慣れない読み方なので、周りに合わせて緊張しながら拝読しました。

なぜ、呉音と漢音があるかというと、律令制度になって、支配層が漢音を推奨したからだと言われています。遣唐使、遣隋使が持ち帰る中国の文章は漢音で読むので、律令政府と官僚の予備校である大学寮では、漢音以外の使用が禁止されました。さらに、『日本紀略』という書物によると、延暦十二年には、桓武天皇が詔勅を発します。

「制。自今以後。年分度者非習漢音。勿令得度。」

この意味は、

「政令を発する。これから以後、年間で僧侶の資格を得ようとするものは漢音を学ぶものでなければ、得度させてはならない。」

というもので、漢音を強烈に推し進めた歴史があったのだと思います。

ところが、私たち僧侶が今も、呉音の読経をしていることを考えると、この政策はうまくいかなかったようです。

ＮＨＫの大河ドラマ「光る君へ」でも描かれましたが、平安時代、藤原道長の時代に博多で宋貿易が盛んにおこなわれました。平清盛も、福原、今の神戸で日宋貿易を行い、その利益で朝廷の権力に食い込みます。さらに、鎌倉時代には、北条泰時（やすとき）が材木座に和賀江島（わがえしま）を作り、宋との貿易を始めました。

宋との貿易によって禅宗が日本に入ってきました。禅宗とともに、饂飩（うどん）、和尚（おしょう）などの唐音の言葉が日本に入ってきます。源信和尚は「げんしんかしょう」と通称しますが、天台宗では、和尚（かしょう）、禅宗のお坊さんは和尚（おしょう）さんと呼びます。浄土真宗では、お坊さんのことを和尚さんとは呼ばない習わしです。

【「は」行の発音】

韓国に出張に行ったときに、「コーヒー」のことを「こぴー」と発音していることに気づきました。韓国には、「はひふへほ」の発音がないので、破裂音の「ぱぴぷぺぽ」で発音します。平安時代の前までは、どうも、日本でもこのように発音したらしいです。現代でも、韓国人で「コーヒー」のことを「コフィ」と発音できるのは、留学した人か英語を専攻した学生と言われています。

随分前になりますが、「冬のソナタ」という韓国ドラマで、ヨン様こと、ペ・ヨンジュンさんが、英語の「F」の発音がきれいにできていました。ソウル大学を卒業しても、「F」の発音ができない韓国人がいるのに、この人は英語の勉強を相当頑張ったのではないかと思いました。

私も、ハングルができるわけではないので出張した時、韓国の人とは英語で話すのですが、食事中に「フォーク」のことを「ポーク（豚肉）」というように発音するので、大変戸惑いました。

録音機のない奈良時代の発音をつまびらかにしたのは、江戸時代の国学者、本居宣長（もとおりのりなが）と言われています。

録音機どころか印刷機もなかった時代に書物を手に入れるには、人の手で書き写すしか方法がありませんでした。『古事記』は、奈良時代に書かれた日本で一番古い書物とされています。しかし、一番古いといっても、現代に残るのは南北朝時代に書き写したものでした。『万葉集』は全二十巻が鎌倉時代に写本されたものが残っていることと比較すると、あとから創作されたものであると、万葉集研究で名を馳せた国学者の賀茂真淵（かものまぶち）は「古事記偽書説」を展開しました。

『日本書紀』は、朝廷に正史として記録されているので、信憑性が担保されているのに対して、『古事記』は、歴史書に引用されたりすることもなかったので、「古事記偽書説」を、江戸時代の知識人は信じていました。本居宣長が十八世紀に『古事記伝』を著して、万葉仮名の使い方を解析して、平安時代の書物では使い分けが曖昧になった奈良時代の万葉仮名の文法を明らかにしました。平安時代に失われたものが記載されているので、奈良時代の書物として『古事記』が再認識されたと言います。

『古事記伝』の中で、「はひふへほ」の発音や「さしすせそ」の発音が、中国の発音の『韻鏡（いんきょう）』と比較して、近世と異なっていたことも指摘されました。『韻鏡』は、日本語の五十音の表のようなもので、日本では、中国語の勉強に盛んに用いられていたようです。『韻鏡』が作成された中国では既に使われなくなってしまったようです。

そして、奈良時代には先ほどの韓国の発音と同じく、「はひふへほ」を「ぱぴぷぺぽ」と発音したと、後世になって分析されました。

ところが、平安時代になると、日本では「ぱぴぷぺぽ」は「ふぁふぃふふぇふぉ」の発音に変っていったそうです。

戦国時代に、イエズス会の宣教師が日本に来て、日本語とポルトガル語の辞典「日葡（にっぽ）辞書」を編纂しました。また、キリスト教を布教するにあたり、イエズス会の宣教師ロドリゲスは、キリスト教を布教するための日本語をローマ字で書き写した、『日本大文典』を著述しました。西洋の文法を勉強した宣教師が、日本語の文法を解析したこれらの書籍を、中世の日本語を研究している学者は貴重な研究の資料として扱っているそうで、「キリシタン文書」と名づけています。

その「キリシタン文書」の中では、「はひふへの」の音を「f」で記述しているそうです。これは、当時「は行」を「ふぁふぃふふぇふぉ」と発音した証拠にしています。もし、戦国時代に発音が「ぱぴぷぺぽ」のままだったら、西洋人は「は行」を「p」で記述していたはずで、更に、「はひふへほ」に変化していたら、「は行」を「h」で記載されていたはずなのです。

「キリシタン文書」だけではなく、本居宣長の説で、『万葉集』で厳密に使い分けられた万葉仮名が、平安時代の書物ではいい加減に使われ出したという事を証拠に、平安後期から江戸時代まで、「はひふへほ」を「ふぁふぃふふぇふぉ」と発音したという考え方が、中世日本語研究をしている学者の中では主流と聞きます。

正信偈などでも、「は行」を「ふぁふぃふふぇふぉ」と発音し、「大悲」は「だいひ」ではなく「だいふぃ」というように発音します。

葬儀の時に読誦（どくじゅ）する「我説彼尊功徳事」から始まる回向がありますが、これは、「がせふぃそんくどくじ」ではなく「がせぴそんく

どくじ」と発音します。他の聖教に比べて、古い発音なのかもしれないです。

【清濁音と鼻濁音】

中国には四声という抑揚のほかに、清濁音も「全清」「次清」「全濁」「次濁」の四種類がありました。日本に言葉が輸入されたときに、この中の「全濁」が清濁音、「次濁」が鼻濁音に当てられてきたようです。

「本願寺」の発音ですが、今は、西本願寺と真宗本廟（東本願寺）で異なることをつい最近知りました。

西本願寺のホームページを見ると、ローマ字では「ＨＯＮＧＷＡＮＪＩ」と記載されていて、真宗本廟は「ＨＯＮＧＡＮＪＩ」と表記されています。

ですので、西本願寺は、「にしほんぐわぁんじ」、真宗本廟は「ひがしほんがんじ」と発音するのが正しいようです。

つまり、西本願寺では、本願寺の「が」は「ぐわぁ」と、鼻にぬく鼻濁音、大谷派では、清濁音で発音します。

最近、大谷派の僧侶から聞いたのですが、京都の真宗本廟では、「悲願」を「ひがん」と発音し、「ひ」も「ふぃ」と発音せず、「が」も清濁音で発音すると聞きました。

ちなみに、正信寺は、浅草の東本願寺を崇敬しておりますので、浄土真宗東ですが大谷派とは異なり、私たちが「悲願」という言葉を発音するときは、「ふぃぐわぁん」に近く、「ぐわぁ」は鼻にぬく鼻濁音で発音します

真宗本廟（東本願寺）大谷派の声明は、誰でも称えられるように現代風の発音に変革されていると聞きます。伝統を守るのか、大衆化を図るのか、宗教を維持発展させていくには、難しい判断なのだと思います。

私たちが称える聖教では、単語の最初にくる「が行」は清濁音、二文字目以降に出る「が行」は鼻濁音にすることが多いです。

例えば、「正信偈」の「行者正受金剛心」（ぎょうじゃしょうじゅこんごうしん）では、行者の「ぎ」は清濁音、金剛の「ご」は鼻濁音で称えるよう習います。

「正像末和讃」に出てくる「三恒河沙」は、ガンジス川の砂の数という喩（たと）えで、数がすごく多いという意味で用いられます。ただ、「三恒河沙」（さんごうがしゃ）というのは、三つの恒河（ごうが）の砂なので、「ご」は二文字目に出ますが清濁音になります。

『仏説阿弥陀経』にも、「恒河沙数諸仏」（ごうがしゃしゅしょぶ）とあり、多くの諸仏という意味で、単語の最初に使われているので、「ご」が清濁音になるのでしょう。この辺りが、声明の難しいところです。

【「詰める」と「飲む」】

お経や偈文、和讃、御文の左わきに「ツ」とか「ノ」と小さく書かれています。これは、「詰める」と「飲む」と言います。

「ツ」は撥音便（はつおんびん）として発音します。「仏」という言葉に「ツ」がついているブツのツの字は発音しないのです。御文（おふみ）で「仏助けたまへとまうさん衆生をば」の「仏」のツは「つ」と発音しません。

「ノ」は鼻で飲むと言われていて、発音するときに、鼻にぬき、声帯を震わせる音にはしません。「念仏往生（ねんぶつおうじょう）」というと

きの「仏」の「ツ」は鼻に飲みます。

東京大谷声明学園ではこのように習うのですが、釘貫氏の著書では、このような説明があり腑に落ちました。

日本語は、母音で終わる文節が多いというのです。例えば、英語でCupというと日本人は、カップと「プ」の字に母音の「う」をつけて発音しますが、英語では子音でおわるので、「プ」の字は口を閉じるだけで終わらせます。日本人の英会話が下手なのは、この母音で終わる癖が抜けないからと言われています。

同じように、中国での「仏」の発音も実は子音で終わるもので、仏教を学んだものとして、「ふつ」と日本語風に発生するのは格好が悪い、または、きちんと仏教を学んでないとみられると思われるのが嫌だったのではないでしょうか。そこで、御文など、日本語に当てはめた時も、「仏」のツの字を詰めたり、飲んだりして、子音で終わるように聞こえる発音をしたのではないかと思います。

念仏を称えるときも、短念仏は「なまだぶ」、三淘念仏でも「なむあみだぁーぶーううう」と発音して、南無阿弥陀仏の最後の「つ」の発音をしません。

【かな文字と発音の変遷】

鎌倉時代に藤原定家という公家であり歌人がいました。権中納言定家ともいわれます。

中納言は、大臣、大納言に次ぐ身分で、従三位相当です。源頼朝が従二位の征夷大将軍ですから、非常に身分が高かったと考えられます。権が付く場合は、定員外の特別職、または、「正」の中納言に対する「副」の役割です。藤原定家といえば小倉百人一首の撰者としても有名です。

藤原定家の和歌では、「女郎花」は「をみなへし」、「奥山」は「おくやま」と仮名で記載しています。この当時、「を」（Ｗｏ）と「お」（Ｏ）、「ゑ」（Ｙｅ）と「へ」（Ｆｅ）と「え」（Ｅ）は明らかに使い分けがありました。

ところが、同じ鎌倉時代に記載された親鸞聖人の和讃は、現代での読みという面では、「彌陀の名号となへつゝ」は「みだのみょうごうとなえつつ」と「へ」を「え」と区別なく読むようになりました。

受ける、いただくという意味の、「冠る（こうむる）」ということばも、和讃では、「かふる」と記載されていますが、実際の発音は、「かむる」となります。「光澤（こうたく）かふらぬものぞなき」や、「光触（こうそく）かふるものはみな」のどちらも「かむる」と読みます。漢字の「冠」であれば、かんむりをいただくわけですから、「かむる」と読むのも頷けます。現代語であれば「かぶる」になるのだと思います。

余談ですが、紫式部が著述した『源氏物語』は藤原定家の整備した鎌倉時代のものを底本（ていほん）として、写本されて現代に広まったもので、紫式部が書いた原本は残っていません。紫式部がどのような字を書いていたか、藤原定家が係り結びなど語法をわかりやすく書き換えていたのではないかなど、良くわかっていないそうです。ちなみに、「光る君へ」で紫式部を演じていた吉高由里子さんは、実生活では左利きだったのですが、ドラマ中は右手で筆をもって和紙に書いていました。普通は、書道の専門家の手に差し替えて映像を作るのだと思っていたら、違っていたという逸話があります。吉高由里子さんの利き手でない右手でしたためられた文字の美しさに、私は全く敵わないと思いました。女優というものはすごいものです。

【おわりに】

「日本」を、「にほん」「にっぽん」と読むのは呉音です。しかし、唐の時代の末期になると「日」を「ジッ」と子音で終わるように読み、「日本」は「ジープン」と発音されるようになりました。これを聞いた西洋人が「ジャパン」とか「ジャポン」と発音するようになったようです。ところが、現代の中国で「日本」は「リーベン」と発音されると聞いています。日本語も、古語と現代語、文語と口語に様々な違いはありますが、発音について、このように変わることはなかったので、お経が著述されている中国語は不思議な言語だと思います。

日本語も、中国語ほどではありませんが、時代とともに、発音が変わったり、かな文字の読みの区別がなくなってきたりしているようです。

本日もいつものように、信心を深めるために法要を営んでいるわけですが、法要で称える聖教に関して、今までお話ししてきた注意をしているという事をお伝えさせていただきました。まだまだ、伝えきれていないこともあり、私の話を聞いて、皆様も同じように発音することは、なかなか難しいことだと思いますが、私たち僧侶が、こういったことに留意して、心を込めて聖教を称えていることを感じていただけると幸いです。

こういった発声の作法も、お釈迦様や親鸞聖人などの高僧の言葉と気持ちを、きちんと皆様にお伝えできればという気持ちを持ってお勤めさせていただいております。

ご清聴ありがとうございました。

浄土真宗

安養山　正信寺